

**前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想**

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論
2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想
  - 2-1：近代の知的状況における宗教思想
  - 2-2：批判哲学から批判的実在論へ
  - 2-3：シュライアマハーの宗教哲学
  - 2-4：ティリッヒの宗教哲学
  - 2-5：波多野精一の宗教哲学
  - 2-6：ヒックと批判的実在論
  - 2-7：言語から宗教的実在へ
    - 1：リクールと解釈学的プロセス
    - 2：イエスの譬えの読解プロセス
  - 2-8：言語論と宗教哲学
  - 2-9：次元論と宗教哲学

7/29

10/7

10/14

**後期：キリスト教と社会理論——経済と環境**

## &lt;前回&gt;ヒックと批判的実在論

## 1. ヒック宗教哲学の問題圏

- ・ *Philosophy of Religion*, Prentice Hall, 1963 (1990).
- ・ *An Interpretation of Religion. Human Responses to the Transcendent*, Yale University Press, 1989.
- ・ *Disputed Questions in Theology and the Philosophy of Religion*, Macmillan, 1993.
- ・ *The New Frontier of Religion and Science. Religious Experience, Neuroscience and the Transcendent*, Palgrave Macmillan, 2006.

## 2. ヒック宗教哲学の基本的構想

## A. 宗教概念

宗教史・宗教現象→基軸時代

ポスト・モダン（本質主義以降）の概念規定→ヴィトゲンシュタイン

↓

自己中心性からの脱却

## B. 宗教批判：近代以降の思想状況における宗教論

自然主義への論駁、宗教経験の擁護→合理性概念の再検討、終末論、  
宇宙的楽観主義、還元主義批判

神の存在論証と悪論・神義論

宗教言語論→宗教的実在論

## C. 宗教的多元性：宗教的状況の現代

多元性と実在→the Real

キリスト教の再解釈→排他主義、包括主義批判

Cの明確なテーマ化にヒックの特徴がある。

## 3. 宗教言語と宗教的実在論

言語の指示機能として、宗教的実在論を論じるという構想。

**2-7：言語から宗教的実在へ**

&lt;問題&gt;宗教哲学の可能性

- ・ 宗教的現実・宗教的実在とは何か。  
     宗教と日常性（→科学）との関係性
- ・ 言語・象徴の指示からアプローチする。  
     第一度の指示から第二度の指示へのメカニズムとは何か。  
     神の言葉（言葉の出来事）とはいかなる言葉か。  
     霊感説を言語論としてどこまで議論できるか。  
     ↓
- ・ リクルールの三重のミメーシスの議論を解釈学的プロセスとして展開し、聖書学の議論へ  
     接続する。  
     読解プロセスにおけるイメージ形成（形態化）  
         キリストの形、キリストと同じ形になる。  
         宗教は生の形態化である。
- ・ モデル・ケースとしてのイエスの譬えの読解 → 説教の聴聞プロセスの構造分析

## 1 : リクルールと解釈学的プロセス

・ Paul Ricoeur, *Temps et Récit I, 2, 3*, 1983-85. (『時間と物語 I、II、III』新曜社)

<ルカ福音書>

10:25 すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるのでしょうか。」26 イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、27 彼は答えた。『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい』とあります。」28 イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」29 しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。

30 イエスはお答えになった。

「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。31 ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。32 同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通って行った。33 ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、34 近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。35 そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』

36 さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。」37 律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」

### A. 三重のミメーシス：解釈学的プロセスの三つのステップ

1. 宗教的テキストの解釈学的プロセスのモデル。  
     リクルールのテキスト解釈学の議論を基礎にして、それにブルトマン、イーザー、ペリンらの議論を組み合わせる。宗教的テキストの次のような三段階のプロセスにおいて進行するものと考えられる。
2. 聖書テキストの読解プロセス：「善きサマリア人」の譬え（ルカ10：25－37、25－30 a + 30 b－35 + 36－37）

### B. ミメーシス1

3. 「先行理解」(Vorverständnis)：作品の作成やその理解にとって前提（一定の視点から

S. Ashina

（解釈の視野）、一定の問題意識に従って、一定の期待、読解行為に先立つ先行理解つまり先入観）。

ブルトマン「すべての解釈は、問題にされ、あるいは問われている事柄についての一定の先行理解によって必然的に支えられている。」

4. 先行理解 1：暗黙的な世界理解（ハイデッガーの *Als-Struktur*）
  - 自己理解・古い自己・古い存在、自己の自明性
  - 「素朴な読解」、第一の素朴さ
 我々読者の先行理解 1
5. 「話者（イエス）－聴衆」（言葉の出来事 1）：話者と聴衆の間には共通の實在（世界・自己）についての先行理解 2。
  - ↓
  - リクール：物語の筋・プロットの作成が行動という実践的世界についての先行理解に基づいている（アリストテレス、行為の再現としての悲劇）。
  - ↓
  - リクールのミメシス 1：テキスト・作品における先行理解
    - 実践的世界の了解（世界内存在の理解構造）を構成する概念のネットワーク、象徴体系、時間性の三つのもの。
6. 学的に適切なテキスト理解のためには、二つの先行理解（著者とそして著者と同時代の読者、現代の読者）のある程度の関連づけが必要になる。
  - 解釈者は作品作成の先行理解 2 について十分に了解していることが要求される。
  - ＝聖書解釈におけるテキストの歴史批判の問題。
7. 概念のネットワーク：ある行動を有意味なものとして理解するのに必要な、「なにが」「なぜ」「どのようにして」「誰と」「誰に対して」といった一連の問いによって表現される諸概念のネットワーク。物語作成の範列的次元（*ordre paradigmatic*）。
  - ↓
  - これらの問いとそれらへの答えに従って分類され相互に関連づけられる諸概念（行動の主体、目的、手段、状況、救助、敵対、争い、成功、失敗など→グレマスの行為体分析）についての実践的理解（具体的な行動に即してこれらの諸概念を駆使できること）を有すること＝行動一般をその特性に従って確認する能力。
  - ↓
  - この範列的次元を基礎にして、諸要素が連辞的に展開されること（*ordre syntagmatic*）によって個々の具体的な物語が成立する。
8. ミメシス 1（生・存在の形態→先行理解）：範列と連辞との二つの軸によって構造化されており、その具体的な形態は文化的伝統によって規定される。
  - イーザー：「テキストのレパートリー」（*Textreperatoire*）
    - ＝作品の場面形成に必要な素材であり、テキストの構成に取り込まれた既存の知識。
9. 先行するテキスト（例えば新約に対する旧約）、社会的・歴史的規範（イエスが依拠しあるいは論駁したユダヤ教の規範）、テキストが生み出された社会的歴史的コンテクスト（イエス時代の政治的経済的な状況・出来事）、時代特有の意味システム（世界理解を可能とする一定の構造を持った現実モデル・枠組み）など。
  - 「善きサマリア人の譬え」：
    1. イエスの譬えが語られた状況として、敵対者との論争が考えられること。
      - 論敵＋民衆（ユダヤ人）
    2. このテキストの読み手はこの最初の語りの状況を理解できる。
    3. ユダヤ人とサマリア人の敵対関係。
    4. エリコからエルサレムの道の危険性。
    5. 隣人愛のテーマとの関わりでこの譬えを読む（譬え＋枠）。

6.イエスの譬えはしばしば神の国の譬えと言われる。

10. Klaus Berger: Exegese des Neuen Testaments, UTB658 1991<sup>3</sup>(1977)

"semantische Felder". Unter "Feld" verstehen wir einen abgrenzbaren Bereich, in dem sich mehrere zusammengehörige Elemente befinden. Semantische Felder sind mehr oder weniger konventionelle Wortverbindungen. ....Bedeutung hat ein Wort nur innerhalb eines semantischen Feldes, den isolierte Wörter gibt es nur im Lexikon. Die Beziehungen der Elemente des Feldes untereinander bilden den semantischen Bedeutungskontext. (138)

### C. ミメーシス 2

11. テキスト作成のミメーシス 1 に基づいて現実化されたテキストは、その成立の状況(「話者―聴衆」状況)から切り離され自律的な存在として固定化される(自己に対する他者)。

↓

テキスト：一定の完結した形態と構造を持つものとして読者の前に存在する。このテキストの固有の形態をミメーシス 2 (エーコの言うテキストの意味・意図・権利が問われる段階)。

12. 「釈義の出発点はテキストの言語的形態であり、この形態がまずそれ自体として考察されねばならない」(Berger:11)。

13. テキストはいくつかの小事件からその「主題」を問いうるような意味ある全体 (Textkohärenz) として物語を構成し、多様な諸要素 (ミメーシス 1 の範列次元にテキストのレパートリーとして用意されていた諸要素) を統合する。

ミメーシス 2 : テキストの自律性に基づく独自の客観化可能な構造を有すること (構造分析の対象、他者)。

↓

この構造は作者の意識的意図とその無意識の作業を作用因としているが、テキストの構造は作者の作業を超えたものとして、それ以上のものがそこに見出される構造体として存在していること (テキストの形相因)。

14. ミメーシス 2 : それに先行するミメーシス 1 とそれに後続するミメーシス 3 とを媒介。

↓

問題 : テキストの読解行為がこの独自の構造体としてのミメーシス 2 から読解行為のプロセスの進行に伴って、どのような仕方でミメーシス 3 が生成するか。

### <読解プロセス>

素朴な世界理解・自己理解 (ミメーシス 1、テキストの背後への第一度の指示)

→ テキスト世界 (テキスト=ミメーシス 2 の前方へ第二度の指示が開示、読者・自己が自らの存在の仕方として了解できる世界=可能的世界)

→ 可能的世界の自己化=新しい自己理解=新しい自己 (世界) の生成 (ミメーシス 3)

15. イーザーの読解行為の現象学 : 読解のプロセスを導くテキストの構造上の特徴 = 「テキストのストラテジー」 (Textstrategien)

テキストの内部に構造化されたストラテジーにしたがって、範列的に用意されている諸要素を、テキストの主題の伝達に向けて、結合する。

16. 読者のイメージ形成作業を促進させるような不確定箇所 (インガルテン) の存在

17. 読者によるイメージ形成=テキストの意味 (テキストの構造ではない。テキストの読解による意味構成) は読者から全く分離して存在するのではなく、読解行為においてテキストの構造と読者の意識 (イマジネーション) が相互作用するところに、したがって読者の能動的な関与において現実化すると考える (エーコの言う、テキストの意図と解釈)

S. Ashina

行為との弁証法)。

＝テキストの構造に基づいてそこに読者のイメージーションが能動的に作用することによってテキスト世界が読者へと開示され（意味から指示へ）、イメージ・形態の意味(Sinnkonfiguration)が読者の意識の内部に形成され展開するプロセス。

#### 18. フッサールの現象学→

・ 読者はテキストの全体を一挙に捉えることはできない（射映）。つまり、テキストは一定の順序によって読み進められることによって、徐々にその全貌を現すという特性を持つ（cf. 絵画や彫刻）。

・ 読者はこの理解しようとしているものの内部で、次々に現れる様々な遠近法の視点（語り手、登場人物、虚構の読者などテキストの意味を解釈する様々な立場）を取りながら移動してゆく。

・ 読解過程で読者がその都度目を向ける断片がその瞬間の主題となるが、その背後には先ほどまで向かい合っていた他の諸断片（それまで読み進んできたそれぞれの箇所）が現在の主題の理解の地平として控えている。

→主題－地平構造：読者が意味を理解する際の視線を調節すると同時に、テキストを遠近法の組み合わせとして統合してゆく。

読者の期待を呼び起こし、そしてそれを修正させ、記憶に新しい変化を引き起こしてゆく。

→個々の断片部分の意味内容は、この動的な主題－地平構造の内部で相互作用を行い、次第に変化し焦点が絞り込まれてゆく（断片部分の意味の明確化）。それと共に、相互作用を通して蓄積された様々な視点とその組み合わせは、読者の意識の中に次第に統一的な意味の地平（首尾一貫して意味）を形成。

＝形態の意味（読解には視覚的イメージに類似のイメージ構成がしばしば伴う）、イメージ形成の自己修正的な動的プロセス。

・ 形態の意味（テキストの意味）：テキストの間主観的構造に基づくものである点では恣意的ではない明確な分析の対象となりうるレベルを有するが、この構造に基づいてそこに統一的意味（一つの脈絡、一貫性）を見出すのは読者の役割。

↓

テキストの読解のよって構成されるイメージは多様なものとなりうると同時に、テキストの構造に基づくイメージをめぐるディスカッションが可能になる。テキストの構造

・ テキストのストラテジー）に導かれて自動的に遂行される主観的なイメージ形成。

ミメーシス 2 から 3 への移行。

19. 文学批判 1（本文批判）：解釈すべきテキスト本文の確定、テキストの基本性格の把握（複合性、成立年代、著者と場所）、

文学批判 2：テキストの言語的・文学的機能の理解テキストの構造分析、テキスト読解における典型的な意味構成過程の再現。

20. テキスト構造：読解におけるイメージ形成を促進するようなストラテジー（コミュニケーション構造）が内在している＝「空所」(Leerstellen)の機能。

<空所あるいは空白：連辞> 断片部分間の結合の欠如（規範や遠近法の視点が明示的な連関なしに配置される。物語のなめらかな連続性の欠如→イメージの展開の期待が破られる）→ 読者に空所を想像力によって補いたい気にさせる（「主人公はここでこのように考えたに違いない」などなど）、空所の配置が巧みであればあるほど読者は想像力をかき立てられ、また空所が多いほどそこから作り出されるイメージも多様になる→読者はこうしてテキスト構造（空所の配置）に導かれてイメージ形成作業を開始する（読者のテキストの意味作用への参与。意味から指示への展開の開始）。テキスト構造と解釈者のイメージーションとの弁証法による形態の意味の形成。

<否定：範列> 主題が暗示されているが明示されていない場合、あるいは慣習的に受け容れられている社会規範が否定される場合に、それは読者のイメージ形成の手がかりと

なる。否定作用は読者の想像力をかき立て、その否定を引き起こした原因の探求に向かわせる。そしてこの作業は、その否定された規範に対して読者自身がどのような態度をとってきたのか、読者自身の規範は何かについて、反省を促す（→自分にとって自明で素朴な世界の意識化。問われているのは自分である）。自己自身に対する批判的距離が可能になり、これはテキスト世界の自己化への準備となる。

↓

21. 読者の意識の中に統一的な形態的意味＝テキスト世界が投影される。  
＝第一度の指示機能の中断を媒介として第二度の指示機能の開示されるプロセス。  
（言葉の出来事2＝自己の可能的世界の開示）

22. 「ジッドは、『贖金つかいの日記』の「第二の手帳」において、「メレディクスやジェイムズとは逆に、読者に私よりも優位にたっているようにさせておくのがいいと思う——読者が著者よりも聡明で倫理意識があり、洞察力が鋭いと思うことができるように、読者が著者の意図に反して、いわば著者が気づいていないこととして、作中人物の中から多くのことを発見するし、物語の展開からも多くの真理を発見すると思うことができるようにするのがいいのだ」（一九二三）と書いているが、『狭き門』においても、読者の協力が必要である。アリサが自分の気持ちをあるがままにすべて正直には語っていないのに加えて、ジェロームは物が見えない人物として設定されているので、ジェロームによる語り、アリサの手紙、「アリサの日記」で、言葉の合間から、あるいはこれらを照らし合わせて、アリサの本当の気持ちを推測することが読者に要求される。」（山本、75-76）

↓

説教では、聖書テキストの空所を補う仕方で、語りがなされることが少なくない。  
「わたしたち」という用語による、テキストと聴衆との同一化。

23. 成功した宗教的テキストの宗教的読解において、このプロセスは自己の意味世界の変革につながる（＝ミメシス3）。  
第一度の指示機能によって古い世界理解あるいは古い自己理解を記述するのではなく、テキスト構造を媒介とした新しい世界理解・自己理解を生成させる。  
世界と自己についての新しい認知。

24. 言葉の出来事1：「話者－聴衆」状況における出来事・意味の弁証法  
言葉の出来事2：「テキスト－読者」状況における構造・解釈の弁証法  
1と2を媒介する解釈の伝統、解釈共同体の存在

↓

言葉の出来事の連続性に基づく「史実のイエス」への遡及？

25. 読解プロセスの現象学：イメージの感情喚起・古い自己への反省  
「善きサマリア人」の譬えの場合。
- 1) テキストの構造：同一の小事件の反復と期待の高まり。
  - 2) ミメシス1の知識に基づく、テキストの逆転構造の把握と、最初の聴衆の驚きの感情の理解。期待、期待はずれ、共感、驚き。
  - 3) 聴衆の視点の追構成。追いはぎに襲われた人の視点からのイメージ形成。  
受動的にことの推移を受け入れるしかない。思いがけない仕方で助けがやってくる。
  - 4) 読者もイメージ形成に巻き込まれる。その際に、イメージ形成による感情の喚起（強盗に襲われた人、聴衆の感情の動きに共鳴・反発）が行われ、このときイエスの譬えは読者へ感性に語りかける神の言葉となる。
  - 5) もしイエスの譬えが神の国の譬えであるとするならば（さきほどの仮定にしたがえば）、この譬えテキストの読解過程においてイメージ化された現実（ミメシス2）は、ミメシス1の基盤にある既存の現実理解に対して、新しい現実と実在（神の国）を指し示すものであり、さらに言えばこのイメージ化においてイエスとの出会いを可能にするものとならねばならないし、なるはずである。これは既存の仕方とは別の仕方で現実を新たに見ることであり、「～として見る」という仕方で現実を二重化する隠喩機能と考えることがで

## S. Ashina

きよう。もし、そうであるならば、信仰者が聖書テキストの読解を自らの信仰的ダイナミズムにおいて読むということは、聖書テキストを拡張された隠喩として機能させることに他ならない。

6) イメージは感情を喚起するがそれにとどまらない。つまり、イメージは新たな思考を呼び起こす。たとえば、「善きサマリア人」の譬えを神の国のリアリティとして経験することによって、読者は、神の国について、読解に先立ってそれについて有していたものよりも深い洞察へと導かれる。

ミメーシス 1：この世の終わりのときに期待される超自然的な出来事といった神話論イメージや、あるいはダビデ・ソロモン王朝の再建といった政治的未来像。

ミメーシス 2 に導かれた読解プロセス：ミメーシス 1 の段階における指示機能の中断。

ミメーシス 3：既存の慣習的な社会コードの転換として神の国をイメージ化。新しい自己理解・世界理解＝新しい実践。

D. ミメーシス 3

26. 以上の過程を経てテキストの読解行為は最終的にはテキスト世界の受容・自己化による読者の実践的領域の再編＝再形態化へいたる（解釈学的プロセスの目標、新しい自己への転換）。

テキスト構造と読者のイマジネーションの相互作用→意識へと開かれたテキスト世界（一貫した形態的意味の世界：ミメーシス 2 から第二度の指示へ）は、読者が外側から眺める対象としてではなく、読者の現実意識（現存在の在り方）において生成→感性レベルでの影響・フィードバックを生じる。エマオ途上のキリスト。

＝テキストという他者との出会いにおいて、古い自己の在り方への反省と新しく示された現実理解を自分のものとして受容するという作業

＝ガダマーの言う地平の融合

読者は自分自身が関与することによって形成されたイメージの世界に引き込まれ、感情を動かされ、そのイメージを自らの意味世界へと取り入れ、意味世界を再編する（テキスト世界の自己化による自己の拡張）。

27. イメージ形成と自己反省を媒介として自己自身の新しい発見（譬えの読解における神の国のイメージ形成とその自己化による自己変革のプロセス）

↓

キリスト教信仰の生成＝テキストの読解における「キリストの形」になる（生の形態化）。

＝ミメーシス 3

28. 解釈学的プロセスの最終段階：解釈作業は歴史批判と文学批判に基づく思想批判へと至る。新しい自己はテキスト読解以前の素朴は古い自己とは同一ではなく、自己批判をへて再び見出された素朴さという意味で第二の素朴さである。

自己のあり方の変革、意志の存在様式の転換。

↓

現実を別様にみることは、それを見る側における存在の転換を同時に引き起こさざるを得ない。

29. 聖書テキストの読解が以上のプロセスを現実を引き起こしうるかは、「善きサマリア人」の譬えに即して言えば、その読解がもたらす新しい現実のイメージが、隣人愛をめぐる問いの転換にまで読者を導きうるかにかかっている。イエスとの論争相手が、イエスの譬えを聴いた後においては、追いはぎに襲われた人の隣人になったのはサマリア人であったと答えざるを得なかったように、信仰のダイナミズムのうちでこの譬えを読み進んできた者は、問いの転換（「誰が隣人か」→「おなじようにせよ」）のインパクトが自らの存在を揺り動かすのを避けることはできない。

## E. まとめ

### 30. 残る問題：

残る問題のうちで、おそらく最大の難問は、キリスト教信仰のダイナミズムが聖書テキストの読解過程との関わりでどのように記述できるかについては、これまでの議論から一定程度理解できたとしても、ではそもそもこの信仰はいかにして可能になったのか、信仰の生成の発端はどのように理解できるのかという問いである。先の実験2において指摘したイメージ形成が信仰の成立に向かって具体的に展開されるのはいかにしてか、それは偶然的に生じるのか、あるいは聖霊の導き、靈感によるのか。この点については結局今回の考察では答えられないまま残されている。この解明にはさらなる探求が必要になる。

### 31. 聖書テキストの読解を本質的要素とする信仰の長所と短所

長所：信仰が個人（読者個人）の主体性の事柄であることを明確に示している点で、このような読解行為における信仰理解は一定のメリットを持っており、こうした信仰は近代的な個人主義を背景とした近代の信仰者にはふさわしいものと言えるかもしれない。

短所：しかし、その一方で聖書テキストの読解に依拠した信仰は問題点も含んでいる。たとえば、テキストの読解は共同体的な祭儀・礼拝から個人における黙読へと信仰のダイナミズムの成立の場を移動させることによって、聖書をもっぱら読むためのテキストとしてのみ評価するという傾向を生み出す。本来聖書は読まれるものというよりも朗読を通して聴かれるべきものであったこと、つまり神の言葉は第一に聴かれるべきものであるということが見失われる危険性がここに生じる。こうして、聖書は神の言葉というよりも、聖書研究の対象と化してしまう。ここにはもはや信仰のダイナミズムは生成しない。つまり、聖書テキストとその読解に一面的に偏った信仰理解の問題点がここにある。

## <参考文献>

1. Peter Stuhlmacher, *Vom Verstehen des Neuen Testaments. Eine Hermeneutik*. Göttingen, 1986<sup>2</sup>.  
『新約聖書解釈学』日本基督教団出版局。
2. Peter Stuhlmacher (ed.), *The Gospel and the gospels*, William B. Eerdmans, 1991 (1983).
3. G.R. Evans, *The Language and Logic of The Bible. The Road to Reformation*,  
Cambridge Univ. Press, 1985.  
, *The Language and Logic of The Bible. The earlier Middle Ages*, Cambridge, 1984.
4. Gerhard Ebeling: *Evangelische Evangelienauslegung*, Tübingen 1991<sup>3</sup> (1941).
5. Ernst Troeltsch, " Ueber historische und dogmatische Methode in der Theologie," 1900 (GS.2).  
『トレルチ著作集』（第二巻）ヨルダン社。
6. Wolfhart Pannenberg, " Heilsgeschichte und Geschichte," 1959. " Die Krise des Schriftprinzips",  
1962, in: *Grundfragen systematischer Theologie 1*, Göttingen, 1979<sup>3</sup>.  
『組織神学の根本問題』日本基督教団出版局。
7. Marcus J. Borg (ed.), *Jesus at 2000*, Westview Press, 1997.
8. John Dominic Crossan, *The historical Jesus*, HarperSanFrancisco, 1992.
9. Klaus Berger, *Exegese des Neuen Testaments*, Quelle & Meyer, 1977.
10. Paul Ricoeur, *Biblical Hermeneutics*, in: *SEMEIA 4*, 1975.  
, *Temps et Récit 1,2,3*, 1983-85.  
『時間と物語 I、II、III』新曜社。
11. Wolfgang Iser, *Der Akt des Lesens*, W.Fink (UTB636) 1976  
『行為としての読書 美的作用の理論』岩波書店。
12. 山本和道『ジッドとサン＝テグジュペリの文学 聖書との関わりを探りつつ』  
学術出版会。
13. 大貫隆『福音書研究と文学社会学』岩波書店。
14. 芦名定道「宗教的認識と新しい存在」『哲学研究』第559号、京都哲学会 1993年。  
「キリスト教信仰と宗教言語」『哲学研究』第568号、京都哲学会 1999年。